

1 はじめに

国内の伝統産業は全体的に衰退が著しく、鳥取県の伝統産業である倉吉絣もその一つである。一方、久留米絣の伝統的な産地である福岡県久留米市やその周辺地域は、現在でも産地としての機能を維持している。そこで、久留米絣産業との比較により、倉吉絣の産業衰退の要因を調査し、産業再活性化につながる提案を考える。ここでは久留米絣の産業持続の背景についての調査研究を扱う。

絣は、インドの所産が起源と言われ、それから世界各地に伝播したという説がある。技法から見れば防染技法による模様染めの一つであると定義される。他の染物では織り上げられた白布の一部を括って染められたりするが、絣の場合糸の段階で染められ、それを織りあげることによって模様が現れる。絣の文様は輪郭部分が「絣あし」という独特な柄であるのが特徴である。国内での絣の産地は木綿の生産地に起こり、絹、麻、絹綿交織へと展開した。久留米絣は、福岡県久留米市を中心として、三潁(みづま)郡、八女(やめ)郡、うきは市、三井(みい)郡にわたって織られている木綿の絣織物である。

2 調査課題

現代の企業は同業種同士での協調が重要視されるようになるなか、伝統産業の世界では、職人同士のつながりが希薄だと感じる職人もいられるようである。しかし、つながりがあることのメリットについては職人自身が自覚しており、伝統産業における職人同士のつながりというのは、産業として持続するために必要なものかもしれない。久留米絣産業の組織の役割や組織化の背景について調査する。

3 調査方法

富久織物と西原糸店へのインタビューと二次資料により調査を行った。

作り手: かすり工房藍の詩 富久織物

富久織物は四代目の洋氏をはじめ、父の公博氏、母の須恵子氏共に久留米絣技術保持者会・会員である。また、文化財を織りながら機械織りも手掛ける。(© 2017 kurume kasuri textile | 久留米絣(かすり)テキスタイル All rights reserved.)



写真: <https://goo.gl/images/ZxkVBe>

写真: <https://goo.gl/images/4kUNqo>

売り手: 西原糸店

西原糸店は糸・繊維製品の卸売業として創業100年の歴史を持つ。店の一角には駄菓子屋さんを構え、久留米絣も扱うお店。対面での販売を心がけており、通信販売などはしていない。(西原糸店ホームページ)



写真: <https://goo.gl/images/Av14nN>



写真: <https://goo.gl/images/KiCpBw>



写真: <https://goo.gl/images/tmzv1>

参考資料

- ・久留米絣の歩み(創始者「井上伝」とその後) - 久留米絣と和雑貨専門の店 - <https://kurume-kasuri.com/founder/>
- ・「久留米絣の歴史」中村健一・SEN'I GAKKAISHI(繊維と工業) Vol.61, No.6(2005)
- ・インタビュー_西原糸店_西原氏.2017/07/09.@西原糸店店舗(2時間程度)
- ・インタビュー_富久織物_富久氏.2017/07/09.@富久織物工房(3時間程度)

インタビュー調査を引き受けてくださった方へ、久留米絣の調査をするにあたり、ご協力頂いた西原さま、富久さま、ありがとうございました。

4 調査結果

●久留米絣が産業として生き残っている大きな要因として考えられる「信用・高品位」を求めた3つの歴史的特質(中村(2005))

① 西南戦争時の信頼回復への道

→西南戦争後に需要が供給量を上回ったことで、大量生産した際に質の悪い久留米絣が出回り、信頼が落ちたことがある。その後信頼回復のために、久留米絣産業に関わる人たちは組織を作り、徹底した品質管理に努めた。

② 鑑定所制度の存在

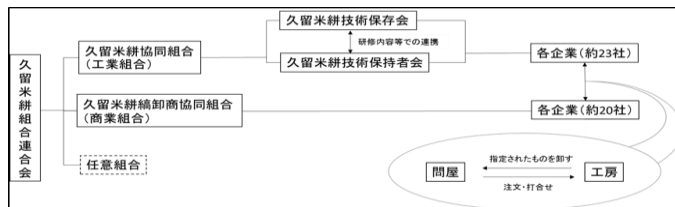
→この鑑定所制度によって、織工は織元による賃金未払いもなくなり安定した織賃を受け取ることができるようになり、織工は織り立ての巧拙が織賃に影響するため急に製織するようになった。

③ 刑務所の利用

→刑務所の利用というのは、刑務所の受刑者を織工とする生産である。これによって、安い労働力で大量に生産できた。

西南戦争後の信頼回復のために組織化されたというのが、現在に続く久留米絣産業の組織背景である。

● 組織



Copyright © 久留米絣協同組合 All Rights Reserved. のウェブサイトの情報を基に作成
企業数は西原氏のインタビュー(2017.7.9)より

久留米絣産業には久留米絣組合連合会があり、これは、工業者の組合である久留米絣協同組合と商業者の組合である久留米絣縞卸商協同組合、その他任意組合からなる。1900年に絣同業者組合(当時)が法定組合に移行してから、全ての事業者は組合に入るよう義務づけられた。そのため、現在でもほとんどの事業者が組合に入会している。商業者組合では、組合として工房から反物を購入し、そこからそれぞれの小売りが購入する。また、小売りが直接工房から買い取る場合もある。このとき、組合に入っていない事業者の場合、良い生地が手に入らないことがある。そのため、小売りとしての事業者は組合に入らざるを得ない。(西原氏2017インタビュー)

● 地域における久留米絣

久留米市では地場産業である久留米絣の魅力を発信するイベントが毎年いくつか開催されている。2017年が20回目の開催であった「藍・愛・で逢いフェスティバル」は、久留米絣協同組合の主催により、ファッションショーや新作発表会、物販、手作り体験などのイベントが催される。西原氏によれば、イベントの目的は大学生や地元の人たちに久留米絣を知ってもらい、好きになってもらうきっかけになることであるという。低予算で組まれた企画では大学生がモデルとなり絣の衣装を着てランウェイを歩く。実際に、そうして絣を好きになってくれる学生もいるという。



ポスター: <https://goo.gl/images/8tP5m>

5 考察

久留米絣産業において、本格的に組織化され、管理体制が整備されたのは西南戦争後であるが、その体制が何度か変革はあったものの、今でも機能している。さらに、生産者から販売者までが高度に組織化されていることで、消費者のニーズが素早く反映されやすく、消費者に受け入れられやすい商品づくりしやすい環境ができています。また、技術者の育成は技術保持者会が、組織のプロモーション活動としてのイベントは協同組合が担っている。このように、職人同士や販売者同士、職人と販売者のつながりが組織化されていることが、久留米絣産業持続の一要因だと考えられる。今後の研究では、組織の役割について詳しく調査していきたい。